

たらいのまほう

『そうだ、流しそうめんだよ。』

そう言ったのはみゆきちゃんだったっけ。

せつかく夏休みに入ったんだし、夏らしいことしたいね、って話してて。ふしぎ図書館じゃあ泳げないし、なにがいいか考えてたときだった。

『いいですね。たしか西の方に竹も生えてましたし、つくれますよね、あかね？』

『ああ、はじめから形なってるし、お好みのヘラ作るより簡単やな』

れいかが訊いて、あかねが応えて、

『それじゃ、こんなかんじで、どう？』

やよいが絵に描いて、みせてくれたんだ。

——図書館の屋根に組まれた、竹のトイ。

そう、ここまでは覚えてる。ここまでは

ヒュウツ、て吹いてきた風が、ほほを撫でてゆく。

「え〜と」

やわらかくて、あつたかい風——夏なのに、あつたかいいのが気持ちいい。

「ん〜と」

本当に、ここは別世界だなあ。

「だからあ」

って、違っ！ そんなこと考えてる場合じゃないってば！

「なんで屋根のってるの。あたしだけ!？」

「痛っ」

大声出した瞬間、頭の後ろが痛くなって、思わず下むいちやったあたしの目に、割った竹が何本か映った。

ゆっくり頭を持ち上げてみたら、屋根の真ん中に椅子。その上にはタライがひとつ。

3 たらいのまほう

なんだか手がガサガサするなあ、と思ってみれば、握ってたのはやよいのスケッチブック。

白い紙には、あの流しそつめんの絵 ああ、そ
うだったけ。

バランスとりながら立ち上がった、そおつと屋根の端まで行くと、下に向かう緑のながーいトイ。竹を何本も組み合わせて、くるーりと図書館巻き込むように地面に向かって伸びている。

そして地面のその横には、やつぱりながーいハシゴが、でれーんと横たわってる、と。

そうだよ。さつき竹とタライ運んできて、最後のひとつ置いたところで足すべらせたんだったけ

「痛ててっ！」

思い出したら、また頭が痛くなった。ポニーテールの結び目くらいのとこ。多分、髪がクツシヨンになってたんだらうな。この髪型で助かったかも。

「ちよつと、休もつか」

あたしは屋根を少し登って、壊さないように横に

なった。なんでこうなっちゃったのか、考えながら。

『おーし、これで図書館まわりに竹回したつたで』
『あとは、屋根の上で流し口を組み立てるだけです』
屋根に寝転がって、目をつむると聞こえてきた。あかねの声と、れいかの声。

そうだったね。最初はみんなで作ってたんだ。だ
けど ああ、声だけじゃなくて、姿も見えるみた
いだ——

「それじゃ、はっしご、はっしごつと」

みゆきちゃんとかやよいが二人して、なんか長いもの
の持って って、ハシゴおっ!!?

「ま、待って待って！ そんなの持って、何する気よ」
あたしがそう言ったら、二人そろってこつち向いた。なーによ、ん？ なんて顔で首かしげてる。

「だつてさ、いまれーかちゃん言ったじゃない。』あとは屋根の上で組み立てるだけ』って」

「屋根に登るなら、はし。でしょ?」

いや、それは正しい。正しいんだけど、さあ。

どう見たつて登る気まんまんの二人に、ひとこと言つてやるつか、つて口開いたとたん、

「なーお。登りたいなら、登らしたつたらええやん」

背中からの声に、言葉とめられた。あかね?」

「一度くらい、軽っ痛い目^め合^あつたらあきらめるやろ」

振り向こうとしたあたしの耳元までやつてきて、あかねがこっそり言うから、あたしもこっそり答えたんだ。

「そつ言つけどなあ、軽くで済むとは限らないだろ
うっ。」

クッションとか命綱とか色々用意して、落ちててもOKにしとけば、あたしも反対しないけどな。でも、それじゃあ

「あんまり、はっきり言いたくないんだよ。怖くて

登らせられない、なんて」

あかねはちらつとやよいたちの方見て、頭かきながらぼそつと言つたつけ。

「ん。それやつたら、ここは一旦解散にしたつたらどや?」ここで止めたりしたらやよいちゃん、意地なつて登つてまうで?」

はあ。それもそつが。よっし!

軽く息すつて、できるだけ明るい声になるようにして、と。

「じゃ、今日はこれでおしまい。明日はそうめん持ち寄つて、仕上げやるうよ。ね」

——つて言つて、みゆきちゃんとやよいを帰したのはあたしなんだよ。確かにね。でもさ、

「あかねとれいかまで帰ることないと思つただけだなあ」

5 たらいのまほう

こぼれた言葉を追って目を開けたら、まだ暮れない空。ぼーっと眺めてると、ふたりの顔が浮かんでくる。

「明日までに仕上げるつもりだって、あかねならわかりそうなものだし」

とりあえずハシゴかけて、材料持って屋根登って、そのうち来るだろうと思ってたんだけど、

「れいかもカンいいし、あの流れなら気づいていいはずだよねえ」

長い付き合いだから、言わなくても大体はわかって、フォローとかしてくれるんだもんね。

それがなぜだが、今回は素直に帰っちゃってさあ、いけないいけない。いつの間にか、ひと頼みになっちゃってる。これじゃダメだ。

そうだよ、たかが竹を組み立てるくらい。あたしひとりだつて簡単に

ひゅあー

立ち上がったあたしの足元から、風がひとつ、吹き上がってきた。

「かん、たん、に？」

口に出したとたん、思わずのどが鳴った。

さすがに、はしごがないと降りられないよねえ。

「と、とにかく初志貫徹、組み立てるのが先っ！」

あたしは思いつきり声出して、脇の竹を抱えた。

そうだよね、中途半端が一番よくないんだから。降りることはあとで考えよう。

あとで ひとりで。

「ふうう」

タライから屋根の下まで竹のトイ延ばしたところで、あたしは頂上のタライをよけて椅子に腰掛けた。滑らないように、タライを裏返して屋根の上置いて、ひとつ深呼吸して気持ち落ち着けて、と。ちよっ

と、飲みものでも欲しいかな

カツン

足で軽く蹴ってみた屋根だけど、伝わってきたのは硬い感じ。

「どうせおとき話っぽい世界なら、お菓子の図書館でもいいと思うんだけどなあ」

ま、もしそうだったら、乗った重さで崩れちゃうんだけどさ。

「みゆきちゃんが乗ったつたら、崩れたーって笑いながら言うんだろうな」

青い空に、お菓子のかけらまみれで笑ってる顔が見える。

「やよいはそれ見て笑ってそうだし」

その横で、一緒になつて笑ってる顔。これも、すぐに浮かんでくるね。でも

「あたしは あたしはそんなの見たら、笑えそうにない、か」

そこが、どうしたって違つとこなんだろうな。

「あかねやれいかだったら、それなりに分かるんだけどなあ」

言ってみてから、もう痛くない頭を振った。

ほんとに分かつてるんなら、いまここにひとりだけのわけないじゃないか

「あーあ、のど渴かわいたア」

大きく息すつて、椅子からころん、と屋根にころがつて。あたしは大きな声出した。

変な考え、頭から追い出すために

出したらほんとに渴かわいてきたな。そういえば、さっき目がさめてから、なにも口に入れてないもんね。

食べ物は仕方ないけど、水くらい持つてきとけばよかつ

——カツン

ん？なに、今の音。

7 たらいのまほう

「気になって起き上がって見たら、あれれ??」

「タライの中に、ジュース? あたし、こんなの持ってきてたっけ?」

知らないシリーズのジュースだから、買ったら覚えてそんなものだけだ いやいや、ちよつと待つてよ。

「さつきあたし、裏返したよね、そのタライ——」

コン、コン

手に持った棒でタライをつついてみたけど、なんにも起きない。

「あ、あはははは 当たり前だよ。ただの、た、タライなんだから」

思わず口に出ちゃったのは、怖いからじゃないよ。うん。

怖いからじゃない。怖いからじゃ よし!

「どっかに置いてあっただけだよ。きつと」

胸いっぱい息すって、笑い飛ばした大声が、そのまま空に消えていった。響かないんだ、よね、ここつて、さ。

ジュースを手にとって、キャップひねって。ふたを開けても音もしないし、いい匂いで痛んでもないっぽい。

「ほら、新品だよ。なーんだ。ははは んぐ」

勢いよく飲んだジュース、なんか冷たいんだけど気にしない。気にしないつたら気にしないっ!

飲み終わったジュースをタライに放り込んで、あたしはそのまま背を向けた。

「はあ。さつきと仕上げて降りたいとこだけど、しっかり固定もできてないもんな。竹がぐらつちやつてるし。ここまでやって出来ませんでした、なんて言えないよねえー」

解説してるわけじゃないけど、ついつい口から出

てきちゃうよ。あんま、背中のおうを気にしたくなくてさ。

「 けど、しばらくのもの落ちちゃったし。

あーあ、せめてしっかり固定できるロープがあればなあ
」

カタン

ん？ またなんか背中から音が って、え？ ええっ！？

「 ちよつと、なんでロープが入ってんの、タライに
!？」

トン、トン、トンッ！

カラのジュースびんの代わりにロープが置いてあったタライのまわりぐるっと、竹のトイの残りで突いて回ったけど、なにもおきないな。ふう。

とりあえず出てきたロープで竹のトイは縛り付けたんだよ。あまりタライは見えないようにしながらね。なんとかそうめんは流せそうだな、ってとこまできたけど 降りれるかな、ってちよつと足をかけたら、ぐにやつとしなつちゃう。あたしの体重じゃもたないか

「 いや、筋肉だ。筋肉は重いんだ。重いんだ くらそあ」

あかねもれいかも、あたしより軽いんだよなあ。べつに、あたしが重いつてわけじゃないんだけど。デカイ分くらいしか いやいや、考えるのやめよう。暗くなつちゃうよ。

それに軽いつて言つたら、みゆぎちゃんややよいの方が軽いし。だからって屋根に登らせるわけにはいかないよ。うん。

『 やよいさんなら、二つ返事で登ってくれるんじゃない
ありませんか？ 』

れいかの音が、頭に響いた。

9 たらいのまほう

そう だね。言えば、いつしよに来てくれたんだろうな。高いところ好きだし。でも、ねえ

くっとう

あちや。おなか鳴っちゃったよ。

重さのこと考えてたせいかなあ。ちやつちやと済ませて帰るつもりだから、あんま食べてないんだよね。

「あーあ、いいかげんおなか空いちちゃったなあ」

カタン

言いながらごろん、とその場に寝転がったとたん、頭の上からまたあの音が聞こえてきた。

がばつと、ひじだけで身体おこして見てみたら

やっぱあるよ、タライの中にサンドイッチ しかもどう見たって買ったものじゃない、手づくりのタマゴサンドが。

それもこの香り、マヨネーズの中にちよつとだけ

ソースが混じってる

??

ひゅう

日が落ち始めて、風邪が吹くといきなり寒くなってきた。外の世界みたいに、夏の格好してたらカゼひいちゃ

「くしゅっ！」

え？

いまの音、なんかこもってたけど、くしゃみだよね？ってことは !!

「おばけじゃ、ない？」

そうだよ、さっきのソース入りタマゴサンドだった

て よおし、それなら。

「あーあ、寒くなつてきちゃったし、早く降りないとなあ。トイレ行きたくなっちゃったよー」

空に身体を、むけたまま、目だけでさぐってたら

カタン

「ほあら、来た　って、見たところに白鳥がいた。頭にハンドルつけて、背中が凹んでる、白鳥　お、おま

「こおらあかねっ！いるのはわかってんだぞっ！！」
「タライに向かっておもいっきり叫んでやったら、

「ぶぶーっ　」

返ってきたのは、高い声だった。へ？

「はずれでしたー」

屋根の真ん中ががばつと開いて、出てきたのは明るい髪の毛の頭　って、や、やよい!?　なんで、やよいが　？

考えてたら、頭だけ屋根からひょい、っと出して、あたしの方じーっとみつめながら、

「だーってぎ、なおちゃんがわたしを仲間はずれにしようとするんだもん」

口とがらせて言われると、ちょっと言葉が出てこないよ。

「え、いや、それは　」

「黙ってひとりでもやろうとするからや」

「水くさいって言葉、覚えるべきですわ」

あたしが口をパクパクやってたら、明るい髪の毛のうしろから、声が二つ。あかねに、れいか　やっばりっ!!

「危険だったらちゃんと言えばええんや」

「それも含めて言ってるんですよ。『水くさい』って」

ふたりとも、声だけで發見せようとしないうけだもん。登り口が狭いこともあるんだろっけど　くっそお、目の前が、じーっと見つめてくるやよいだけじゃ、怒鳴りもできないじゃないかっ!!

「こないだね、屋根裏に行く階段、みゆきちゃんが見つけたんだ。そこから屋根にも出られないかなー、って思ってたやってみたの」

ホントははしこの方が気持ちよさそうだけどでもなおちゃんが登っちゃダメって言うなら、わたしは聞くよ?　ともだちだもん」

11 たらいのまほう

こぶし握りしめてるあたしに、くびかしげながら
やよいが言った。見てたら、思わず笑っちゃったよ。
あ、ははははは あーあ。

そっか、そっだよなあ。ちよつと、先走ってたかも
しれない。中から登れるなんて、あたしには思いつ
きもしなかったし。

へんな心配しなくても、やよいは、ちゃんと聞い
てくれる子だったっけ

「で、それはそれとして なおちゃん、はい、ど
うぞ 」

ん？

「目も耳もふさいでるから、遠慮いりませんわ♡」

「なんなら鼻もふさいどこか 」

3人の声といっしょに、ずずつ、と音立てながら、
こつちに押されてきた。白鳥のまるくて大きな目と
目が会って って、ちよつとお！

「だ、れ、が、使、う、か、あ、っ、っ、っ、!!」